

群 教 セ	F08 - 01
	平 29.265 集
	生徒指導

自ら適切に判断して 行動することができる児童の育成

— 自他を大切に自己表現トレーニングと
課題を共有する場の工夫を通して —

特別研修員 児島 美嘉

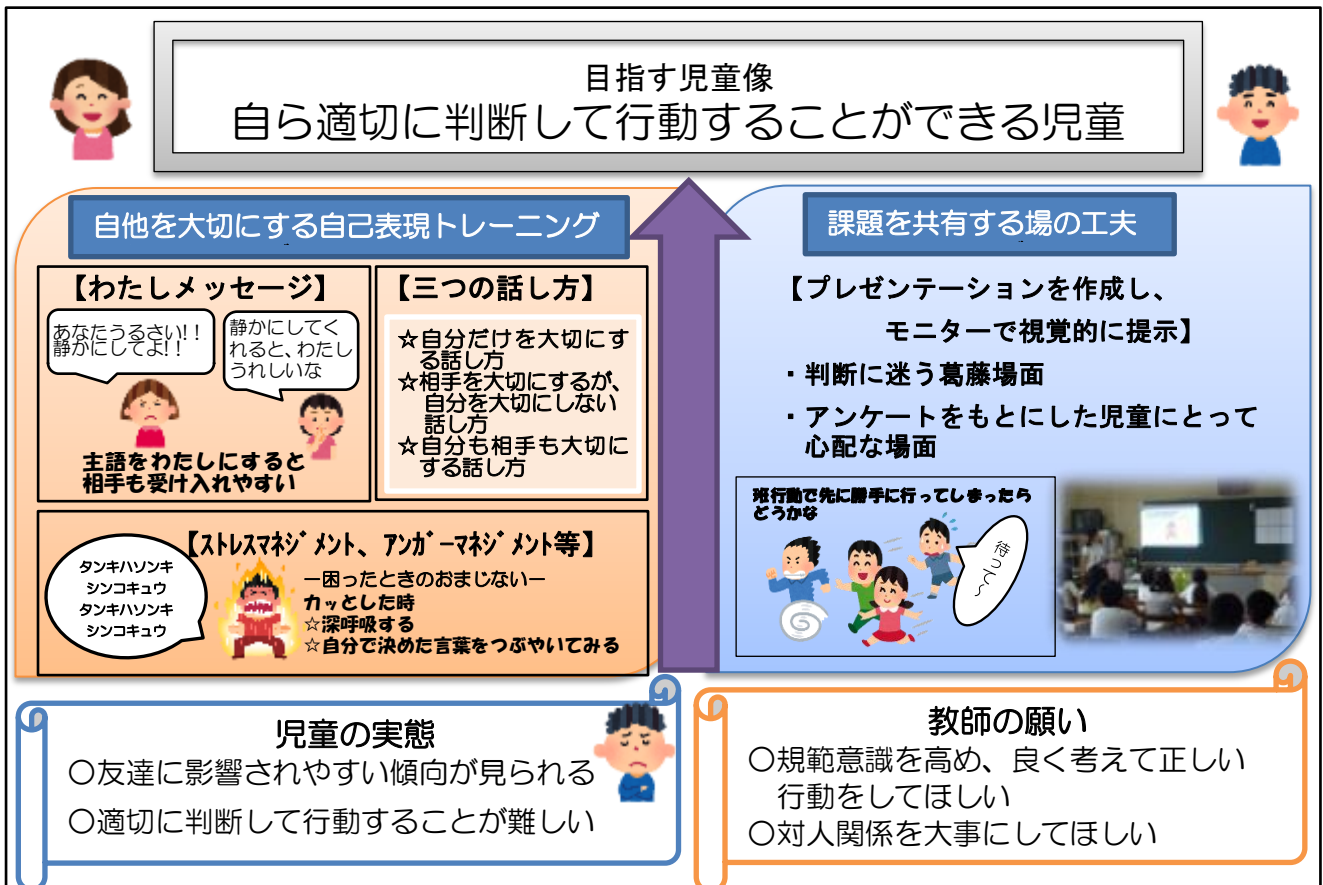
I 研究テーマ設定の理由

文部科学省は、「生徒指導提要」（2010:12）の中で、生徒指導の意義を「児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」としている。また、同省の「生徒指導に関する教員研修の在り方について」（2011:6）では、「自己指導能力とは、児童生徒が基本的な生活習慣を確立し、規範意識に基づいた行動様式を獲得するとともに、対人関係を築き、問題や対立が生じてもそれを解決し、向社会性の豊かな人間へと成長できるように促すことである」と示されている。児童が規範意識に基づき、正しく判断して行動することは、対人関係を築き、豊かな人間性を育てていく上で大切なものである。

本研究は、その規範意識と対人関係に着目し、児童が自ら適切に判断して行動する力を獲得することを目指したものである。児童の実態として、友達に自分の意志を伝えられず、安易に同調してしまう傾向が見られる。そこで、自他を大切に自己表現の仕方を学習し、そのスキルを身に付けることで、自分の意志を友達に安心して伝え、より適切な行動をとることができるようになることを考えた。また、適切な判断が必要とされる場面を提示し、そのような場面ではどうすれば良いかを自分に置き換えて考えさせることは、実際に適切な判断をして行動するために有効であると考え、本研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

本学級の児童の多くは、学校生活全般に真面目に取り組み、比較的楽しく穏やかに過ごしている。しかし、時として、友達との関係を重視するあまり、友達に注意できなかつたり、流されてしまつたりする児童も見られる。その行動が正しくないと分かっている、周りに合わせてしまうことがないよう、しっかり判断して正しく行動することができるようになってほしいと考える。そこで、以下のような二つの手立てを講じた。

手立て1 自他を大切に自己表現トレーニング

- ・「わたしメッセージ」では、主語を自分にするので、その時自分はどう感じているかを相手に伝えるので、相手も非難されたと感じにくく、素直にその言葉を受け入れることができるようになることを学習する。
- ・攻撃的（自分を大切にすることが相手を大切にしない）話し方、非主張的（相手を大切にしながら自分を大切にしない）話し方、適切な（自他共に大切にすることが）話し方の「三つの話し方」のアサーショントレーニングをすることで、対人関係を築く上で望ましい話し方を身に付けることができる。
- ・アサーティブな会話や、ストレスマネジメント、アンガーマネジメント等について、学習する機会を設けることで、自分も相手も大切に自己表現の仕方や、問題解決の方法を学習し、それらを生かして、適切に判断することができるようにする。

手立て2 課題を共有する場の工夫

- ・学校生活で起こる判断に迷うような葛藤場面や、児童へのアンケートから挙げられた心配な場面について、イラストを用いたプレゼンテーションを作成し、視覚的に分かりやすくモニターで提示する。
- ・全員で身近な課題を共有することで、切実感のある話し合いにし、自分はどのように行動すれば良いかをしっかり考え、適切な判断をすることができるようにする。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- アサーティブな会話である「わたしメッセージ」「三つの話し方」等を学習したことにより、話し合いや普段の会話のときも「○○してくれるとうれしいな」と自分を主語とし、相手を気遣った話し方をする児童がよく見られるようになり、トラブルが回避される場面もあった。
- 友達がカッとなっているときに、「深呼吸して」などと適切なアドバイスをする姿が見られるようになり、落ち着いて行動できるようになった。
- 児童のアンケートをもとに、予想される心配な場面をイラストを用いたプレゼンテーションで視覚的に提示したことで、児童は興味・関心を持ち、より身近な問題として捉え、切実感を持って考えることができた。
- 班での話し合いの結果、友達に注意するときも言い方に気を付けることが大切だと考える児童が多く見られた。友達が間違えた行動をした時には、優しく注意することが必要だと考える児童が増え、「席に着いた方がよい」「静かにしよう」などの声掛けが自然にできるようになった。

2 課題

- 学習した直後は行動に気を付けているが、普段の行動においても適切な判断や行動がとれるように、継続して自己表現トレーニングを行うことが必要だと思われる。また、話し合い活動を充実させ、決定したことを実践できるように支援するなど、さらに手立てを講じていく必要がある。
- アサーティブな会話やストレスマネジメント、アンガーマネジメントを学習し、対人関係によい影響をもたらしても、そのことが適切な判断や行動に結び付いていない児童も見られる。今後は、普段の生活でも、適切な判断や行動ができている児童を取り上げて紹介し、啓発を図るなどの手立てを工夫していくことが大切である。

実践例

1 議題名 「みんなで楽しいチャレンジスクールにしよう」 (第4学年・2学期)

2 本題材について

所属校では4年生で一泊二日のチャレンジスクールを行っている。みなかみ町「たくみの里」での班活動後に、地元に戻り、市青少年育成センターで宿泊する。小学校で初めての宿泊行事を控え、不安や緊張を感じている児童も見られる。事前に何が心配かアンケートを実施し、その結果を視覚的に提示する。児童が、みんなのためにどう行動すれば良いか、何が出来るかを考えることは、集団生活の中でしっかり判断して正しく行動できるようにするために、大変有意義なことであると考えている。

本学級には、日本語が堪能でなかったり、特別な配慮が必要であったり、自分の考えを全体の前で話すことが苦手であったりする児童もいる。また、これまでの学習では、一人が模範的な意見を言うと、他の児童も内心とは異なってもそれに合わせて発言する場面が見られた。そこで、自分の意見を付箋紙に書き、小集団での話し合いの中で発表する場を設けることで、全員が安心して発言することができたり、一人一人の考えを大切に育てる態度を育てたりしたい。

さらに、事後にチャレンジスクールを行い、自分たちで決めた目標に向けて努力し合うことが行事の成功を導くという体験を味わうことで、達成感を感じることができるようになると考える。

以上のような考えから、本題材では、以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	みんなで楽しいチャレンジスクールにするために大切なことを考えて話し合い、クラスの「チャレンジ目標」を決める。	
評価 規 準	集団活動や生活への 関心・意欲・態度	学級の生活上の問題に関心を持ち、周りの児童と協力して、意欲的に集団活動に取り組もうとしている。
	集団の一員としての 思考・判断・実践	楽しい学級生活をつくるために話し合い、自己の役割や集団の中におけるより良い行動などについて判断し、協力し合って実践している。
	集団活動や生活につ いての知識・理解	みんなで楽しい学級生活をつくることの大切さや、学級集団としての意見をまとめる話し合い活動の計画的な進め方などについて理解している。
時間	主な内容	主な学習活動
事前の 活動	問題の発見 議題の選定	<ul style="list-style-type: none"> 「わたしメッセージ」「三つの話し方」「上手な断り方」「お願いの仕方」など、アサーティブな話し方について学ぶ。 ストレスマネジメント、アンガーマネジメントについて学ぶ。 チャレンジスクールで心配なことについて、書き出す。
本時の 活動	問題の意識化 出し合う 比べる まとめる	<ul style="list-style-type: none"> チャレンジスクールにおいて予想される心配なことを確認する。 楽しいチャレンジスクールにするためには、どうすれば良いかを考え、班で話し合い、それをもとにクラスの目標を集団決定する。
事後の 活動	実践と 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> チャレンジスクールでの実践について自己評価するとともに、班の友達の良いところや頑張りを評価し合い、チャレンジスクールのしおりにシールを貼る。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は、チャレンジスクールの班で話し合いを行い、自分の意見を付箋紙に記入した上で少人数での話し合いをすることで、自分の意見を言いにくい児童も積極的に参加できるようにした。また、チャレンジスクールの班で話し合うことで、実際の班活動をイメージしやすくさせた。班では一人一役を与え、自分の仕事をやりきることで、全員が意欲的に話し合いに参加できるようにした。そして、班で話し合ったことをホワイトボードに記入し、黒板に掲示して可視化することで、その後の全体での話し合いの際に同じような言葉をまとめるときに役立つようにした。

そのほか、児童が適切に判断して行動できるようにするために、次の手立てを講じた。

手立て1 自他を大切にする自己表現トレーニング

アサーティブな会話や、ストレスマネジメント、アンガーマネジメント等について、事前に学習する機会を設けた。本時は、イラストを用いたプレゼンテーションにより、今までのトレーニングの振り返りを行うことで、自分も相手も大切にする自己表現の仕方を想起させ、適切に判断し行動する際に生かせるようにした。

手立て2 課題を共有する場の工夫

小学校で初めての宿泊行事であるチャレンジスクールにおける心配なことについて、アンケートを実施した。それをもとに、たくみの里での班活動と青少年センターでの宿泊活動という場面について、イラストを用いたプレゼンテーションを作成した。視覚的に分かりやすく場면을提示し、話合いに切実感を持たせるとともに、自分はどのように行動すればよいかをしっかりと考え、判断できるようにした。

4 授業の実際

(1) 事前の活動

事前の学習において、自他を大切にする自己表現トレーニングについて学習する機会を設けた。

「わたしメッセージ」では、気持ちを伝える際に、自分を主語にして会話することを学んだ。あなたを主語とするあなたメッセージでは、相手は責められたり非難されたりしていると感じやすく、トラブルになりやすい。例えば、遅く来た友達に対して「遅いよ。(あなたは) どうして早く来ないの」と言うのと、「来ないから(わたしは) ずいぶん心配したよ」と言うのでは、相手の受け止め方が全く異なることをペアでロールプレイをして学習した。

「三つの話し方」では、攻撃的(自分を大切にするが相手を大切にしない)話し方、非主張的(相手を大切にしながら自分を大切にしない)話し方、適切な(自他共に大切にすること)話し方の三種類の話し方について、アサーショントレーニングを行った。児童の良く知るキャラクター名の「○○みたい」という意見が出て、親しみが広がり、適切な話し方の定着につながった。

また、相手を不快にさせない「上手な断り方」や「お願いの仕方」等もロールプレイで学習した。

さらに、嫌な気分になった時に、その気分をそのまま表出させず、自分をコントロールするために、「6秒待つ」「その場を離れる」「深呼吸する」「自分で決めたおまじないの言葉をつぶやく」等の「ストレスマネジメント、アンガーマネジメント」(図1)についても学習した。

このように自己表現トレーニングを行うことにより人間関係を良好に保ち、相手を傷つけないような社会的スキルを身に付けることができるようにした。

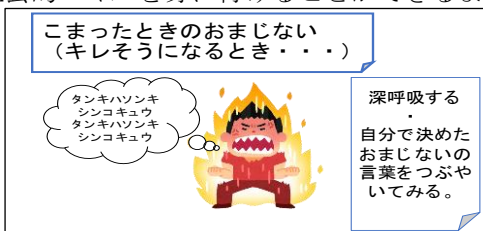


図1 ストレスマネジメント、アンガーマネジメント

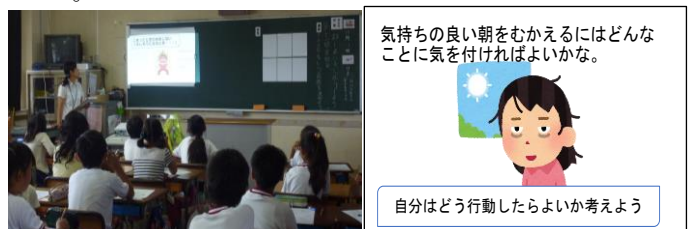


図2 モニターで視覚的に提示する様子と「心配な場面」

(2) 本時の活動

① 課題を共有する場

小学校で初めての宿泊行事であるチャレンジスクールにおける心配なことについて、事前にアンケートを実施した。「夜眠れなかったらどうしよう」「自分勝手な行動を取る人がいたらどうしよう」などの意見が多かったため、それをもとに、たくみの里での班活動と青少年センターでの宿泊活動という場面について、イラストを用いたプレゼンテーションを作成した(図2)。視覚的に提示することで、実際の場면을意識させ、適切に判断して行動するための話合いができるようにした。

また、チャレンジスクールでの人間関係を円滑にするために、以前から学習してきた自己表現トレーニングの内容をプレゼンテーションで提示することにより、全員で振り返ることができた。

児童は、部屋での夜の過ごし方や班活動中に勝手な行動をする人がいたらどう対応するか、注意するならどのように言えばよいかなど真剣に考え、一人一人が自分の意見を付箋紙に書くことができた。

② 班での話し合い

一人一人が書いた付箋紙を台紙に貼り、班のみんなの意見を見ながら話し合いができるようにした。そして、班の意見を一つにまとめ、ホワイトボードに記入したものを黒板に掲示した(図3)。班では一人一人が話し合いの役割を持ち、協力して円滑に話し合いを行う体験をした。



図3 班の話し合いの様子と班の意見

③ 学級全体での話し合い

班の意見を出し合った上で、学級全体で話し合った。班の意見からは「自分がわがままを言わないで、誰かがわがままを言ったら注意する」「自由行動をしないで、みんななかよく時間を見て行動する」「悪口を言わずに優しく話す。うるさくする人がいたら注意し合う」「疲れたらその場で1分休んであげる」「みんな楽しく元気にして、夜は早く寝て気持ちよい朝をむかえる」など、適切な行動がたくさん挙げられていた。みんな



図4 全体の話合い

で課題を共有し、自己表現トレーニングの振り返りを行ったことで、円滑な人間関係を保ちながら、規律ある行動にしようとする意見ばかりであった。さらに、「〇班の意見がいい」と自分たちと違う班のよさも見付けられた。そこで、班の意見の中から共通するようなキーワードを探し出し、まとめるようにした。そうすることで、多くの児童が積極的に話し合いに参加することができた(図4)。その結果、楽しいチャレンジスクールにするためのクラスの目標を「チャレンジ目標」として「ルールを守り自分勝手にしている人がいたらやさしく注意して楽しく行動しよう」に決定した。話し合いの感想には「チャレンジスクールで、みんなで決めた目標だからしっかり守る」など、決意が書かれていた。

(3) 事後の活動

① チャレンジスクール

チャレンジスクール当日は、雨で班活動が縮小されたものの、目標を持って行動することができ、みんなで協力しようと努めていた(図5)。チャレンジスクールのしおりに、1日目と2日目に頑張っている友達を書くように促し、友達の良いところを探しながら過ごすことができた。



図5 チャレンジスクールの様子

② 振り返り

チャレンジスクール後に、目標に対して頑張ることができたかを聞くと全員が肯定的な評価をした。頑張った人は自分でシールを貼るとともに、頑張った友達にもシールを贈るようにした(図6)。たくさんの友達の頑張りを見付けることができ、嬉しそうに贈り合っていた。

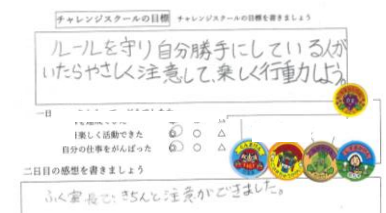


図6 チャレンジスクールのしおり

5 考察

児童はチャレンジスクールに向けた話し合いの中でも、これまで行ってきた自己表現トレーニングを意識し、注意をするときは、相手を傷つけずに、相手に分かってもらう言い方を取り入れようとしていた。

実際に児童が心配していた場面をプレゼンテーションにして、全員で見て課題を共有することで、真剣に考え、切実感を持って班や学級全体での話し合いに取り組めた。そして、「この場面ではこうしよう」という、より適切な判断につながったと考えられる。

実際にチャレンジスクールでは、班活動で適切な行動がとれるよう、皆が声を掛け合い、協力し合っていた。適切な行動ができた人には事後にシールを贈り合い、友達を認め合った。

このような活動を行うことで、児童は互いに優しく注意し合えるようになった。適切に判断して行動する大切さや心地よさを実感し、規範意識が高まったと考えられる。今後も、児童が常に適切に判断して行動することができるよう、互いに認め合う活動を取り入れたら、教師が児童の行動に対して認めて賞賛したりするなどの指導・支援を継続的に行っていく必要があると考える。